

第6回 「日本語大賞」

テーマ

^{いま} ^{つた} ^{ことば}
「今、伝えたい言葉」



中学生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

もっけだの

東京都

早稲田大学高等学院中学部

2年 長南 直弥

僕は今年のお盆に山形県庄内地方の祖母の家に帰省した。長旅で疲れた体を伸ばし車から降りると、すぐ祖母が「よぐきたの。」と温かい庄内弁で出迎えてくれた。祖母は七十代なのに畑仕事も家事もこなす、パワフルな人だ。祖母は毎朝五時に起き、掃除から調理まで多くの家事を家族が起きてくる前に終わらせてしまう。そこで僕は、早起きして朝食づくりを手伝うことにした。まず、トマトやイチゴなどを畑で収穫し、洗って新鮮なまま食卓に出す。そして、僕の家族といとこの家族を合わせた九人分の手作り料理と食器を用意し、食後は後片付けや食器洗いなどをするのだ。この朝の手伝いだけでもすっかり疲れってしまった僕は、涼しい顔でできばきと家事をこなす祖母に頭の下がる思いで一杯になった。

次の日の朝、野菜の収穫を手伝っていた僕は、たまたまトマトを籠に入れる祖母の手が目に入った。その手は、爪の間に土がこびりついたままの、ごつごつした固い手だった。皴も多く、農作業による傷で荒れた手は、農作業の厳しさと祖母の長年の苦勞を物語っていた。そして、この手こそが今までずっと野菜を育て、家族のために働いてきた手なのだと考えると、僕の手伝いなんて、祖母の苦勞の一部にも満たないものだど気付かされた。少し手伝っただけで、祖母の苦勞を全て経験した気になっていた自分が恥ずかしくなった。祖母は僕が考えつかないほどの苦勞を見えない所でしてきたのだ。そう考えると、いつも祖母は、家族が起きる前や、いとこが部活に行っている間など、やはり見えないところで家族のために働いている。自分の苦勞を家族には見せないのだ。

このように、祖母は料理一つとっても本当に家族のために多くの時間をかけてくれている。その苦勞を知った僕は、食卓に並んだ祖母の料理を、普段の食事をとるのと同じ感覚では食べられなかった。祖母が一人で何か月も前から世話をし、収穫して料理を作ってくれている、そう考えたらありがたくて感謝をせずにはいられなかった。そこで僕は、「ありがとおばあちゃん、おいしいよ。」と言って感謝の気持ちを伝えてみた。祖母は本当に嬉しそうな笑顔で応えてくれたが、これでは祖母の苦勞を知らなくても言える言葉だなあと思ひ、まだじっくりきていなかった。もつと、祖母の心に届く言葉を探していた。

ある日、叔父さんと庄内弁について話していた時、身近で奥深い言葉だということ、
「もっけだの」という言葉を教えてくれた。僕がそのことについて詳しく質問していると、
叔母さんやいとこ、祖母まで集まって、庄内人としてとても誇らしそうに様々なことを話してくれた。

「もっけだの」とは、自分の為に相手が何かをしてくれた時など、「ありがとう」という感謝と、「申し訳ない、悪いね」という恐縮が、いっぺんに伝わる言葉だという。例えば近所同士で、「野菜さえっぺとれたから食べれ。」「ああ、わざわざもっけだのお。」といった具合だ。そんな話を聞きながら、嬉しそうに相槌を打つ祖母の姿を見ていたら、この言葉こそ祖母の苦勞に、恐縮と感謝の気持ちを表すのにぴったりな言葉なのではないかと思った。恐縮といっても、「申し訳ない」のような堅苦しくて形式的なものではなく、もっと身近でその行為に尊敬を表すような語感を持っている。それに、僕のために費やしてくれた時間と苦勞の大きさも知ったうえで、心から感謝の気持ちを表すことができる言葉だ。そして何よりも庄内の人にとって、この言葉は「ありがとう」よりも特別で、思いが凝縮されているように感じるだろう。

僕はあれから心を込めて「もっけだの」を使える機会を狙っている。祖母は定期的に、畑で採れた新鮮な野菜や手作りのお惣菜を僕にたくさん送ってくれる。その時は僕から祖母へ電話して、密かに勉強した庄内弁で感謝の気持ちを届けようと思う。「おばあちゃん。こんげえっぺもらて、もっけだの！」と。